

2018年 梅雨のまとめ

平成30年9月3日 新潟地方气象台

1 梅雨入り・明けの時期

事後検討（注1）による2018年の梅雨入り・明けの時期（注2）は表1のとおりである。

表1 今年の梅雨入り・明けの時期

地域名	梅雨入り	梅雨明け
	今年 (平年)	今年 (平年)
沖縄	6月 1日ごろ (5月 9日ごろ)	6月23日ごろ (6月23日ごろ)
奄美	5月27日ごろ (5月11日ごろ)	6月26日ごろ (6月29日ごろ)
九州南部	6月 5日ごろ (5月31日ごろ)	7月 9日ごろ (7月14日ごろ)
九州北部	6月 5日ごろ (6月 5日ごろ)	7月 9日ごろ (7月19日ごろ)
四国	6月 5日ごろ (6月 5日ごろ)	7月 9日ごろ (7月18日ごろ)
中国	6月 5日ごろ (6月 7日ごろ)	7月 9日ごろ (7月21日ごろ)
近畿	6月 5日ごろ (6月 7日ごろ)	7月 9日ごろ (7月21日ごろ)
東海	6月 5日ごろ (6月 8日ごろ)	7月 9日ごろ (7月21日ごろ)
関東甲信	6月 6日ごろ (6月 8日ごろ)	6月29日ごろ (7月21日ごろ)
北陸	6月 9日ごろ (6月12日ごろ)	7月 9日ごろ (7月24日ごろ)
東北南部	6月10日ごろ (6月12日ごろ)	7月14日ごろ (7月25日ごろ)
東北北部	6月11日ごろ (6月14日ごろ)	7月19日ごろ (7月28日ごろ)

事後検討の結果、北陸地方の梅雨入りの時期は、当初発表日（6月10日ごろ）より1日早い「6月9日ごろ」に、北陸地方の梅雨明けの時期は、当初発表日どおり「7月9日ごろ」に確定した。

北陸地方（新潟県・富山県・石川県・福井県）の今年の梅雨入りの時期（6月9日ごろ）は、「平年並」の階級（「平年並」の範囲は6月8日～14日）となり、昨年（6月25日ごろ）よりも16日早かった。また、梅雨明けの時期（7月9日ごろ）は平年より「かなり早い」階級（「かなり早い」の範囲は7月15日まで）となり、昨年（8月2日ごろ）よりも24日早かった。1951年の統計開始以降、これまでの最早は7月2日ごろ（2001年）で、7月9日ごろの梅雨明けはこれまでの早い順から3位タイとなる（これまでの3位：1955年・1958年・2011年）。

梅雨入りについては、当初発表日より1日早い6月9日から北陸各県で悪天日（日照時間が5時間未満の日）が継続し、6月14日は好天日（日照時間が5時間以上の日）となったものの、16日にかけて悪天日が続いている。その後、好天日の続いた時もあったが、寒気や前線などの影響で曇りや雨で悪天日も多く、事後検討により梅雨入りを6月9日ごろに確定した。梅雨明けについては、7月上旬の中頃は前線が北陸地方に停滞したため各地で大雨となったが、7月9日以降は日本海西部から北日本まで前線が北上し、高気圧に覆われて晴れの日が多くなり、事後検討により梅雨明けを7月9日ごろに確定した。

注1：梅雨入り・明けの時期は、過去の実況と数日から1週間程度の天候予想に基づいて、「梅雨の時期に関する北陸地方気象情報」として速報的に発表（当初発表）する。後日、天候の経過を考慮して再検討したうえで確定する（事後検討）。記録として残るのは、この事後検討の値である。

注2：梅雨の入り・明けには平均的に5日間程度の遷移期間がある。その遷移期間の概ね中日をもって「**日ごろ」と表現する。

2 北陸地方の梅雨の時期（6月～7月）の降水量

北陸地方の梅雨の時期（6月～7月）の降水量平年比は70%で、「少ない」階級となった（「少ない」の範囲は65～84%）。なお、1946年以降で6月～7月の降水量が最も少ない年は1994年（平年比36%）で、最も多い年は1964年（平年比175%）である。

各地の梅雨の時期（6月～7月）の降水量は表2のとおりである。6月の階級は、相川と敦賀で「平年並」だったが、高田と伏木で「かなり少ない」、その他の地点は全て「少ない」で、北陸地方平均としては「少ない」階級となった。一方、7月の階級は、敦賀は「多い」、相川、富山、金沢、輪島、福井は「平年並」、伏木は「少ない」、新潟と高田は「かなり少ない」となり、北陸地方平均としては「平年並」の階級となった。

同時期の最大日降水量、最大1時間降水量、最大10分間降水量は表3のとおりである。

表2 梅雨の時期の降水量

地点	6月		7月		6月～7月合計		
	降水量 (mm)	平年比 (%)	降水量 (mm)	平年比 (%)	降水量 (mm)	平年値 (mm)	平年比 (%)
新潟	66.5	52	42.0	22	108.5	320.0	34
相川	115.5	90	162.5	94	278.0	300.8	92
高田	54.0	37	48.0	23	102.0	355.9	29
富山	118.5	65	207.0	86	325.5	423.0	77
伏木	82.5	49	136.0	58	218.5	401.5	54
金沢	97.5	53	207.0	89	304.5	417.0	73
輪島	115.5	71	178.5	88	294.0	365.2	81
福井	92.0	55	257.5	110	349.5	399.9	87
敦賀	138.0	83	228.5	117	366.5	361.5	101

表3 梅雨の時期の最大日降水量、最大1時間降水量、最大10分間降水量

地点	最大日降水量 (mm) (月日)	最大1時間降水量 (mm) (月日)	最大10分間降水量 (mm) (月日)
新潟	24.5 (6.27)	15.5 (6.27)	5.0 (6.27)
相川	56.5 (7.8)	27.5 (6.29)	8.0 (6.29)
高田	36.5 (7.5)	10.0 (7.5)	8.0 (6.30)
富山	114.5 (7.5)	25.5 (6.28)	8.0 (6.28)
伏木	69.0 (7.5)	16.0 (6.28)	7.5 (7.7)
金沢	91.5 (7.7)	28.5 (7.7)	10.0 (6.29)
輪島	67.5 (7.6)	19.0 (7.6)	6.5 (6.29)
福井	106.5 (7.5)	22.0 (7.6)	7.5(7.6及び7.7)
敦賀	151.0 (7.5)	30.5 (7.5)	8.5 (7.5)

(注) 値の横に)や]がある場合には、使用したデータに欠測等が含まれていることを示す。

)付きの値(準正常値)は通常のものと同様に扱うことができるが、]付きの値(資料不足値)については、統計日数(統計に用いた品質が十分な日数)を气象台等に確認して、品質を確かめてから使用されたい。

3 梅雨の特徴

平成30年の梅雨入り・明けと梅雨の時期の降水量（6～7月、沖縄と奄美は5～6月）の階級は以下のとおりである。

梅雨入り

- ・かなり早い：なし
- ・早い：中国、近畿、東海、関東甲信
- ・平年並：九州北部、四国、北陸、東北南部、東北北部
- ・遅い：九州南部
- ・かなり遅い：沖縄、奄美

梅雨明け

- ・かなり早い：中国、近畿、東海、関東甲信、北陸、東北南部
- ・早い：九州南部、九州北部、四国、東北北部
- ・平年並：沖縄、奄美
- ・遅い・かなり遅い：なし

梅雨入りは「平年並」の地方が多く、次いで「早い」地方が多かった。一方、梅雨明けは「かなり早い」地方が多く、次いで「早い」地方が多かった。梅雨の時期の降水量は、四国と近畿で「かなり多い」、奄美、九州南部、中国で「多い」、九州北部、東海、関東甲信、東北北部は「平年並」、北陸と沖縄は「少ない」、東北南部は「かなり少ない」となった。

4 北陸地方の梅雨の経過

(1) 6月の経過

上旬は、期間の前半は高気圧に覆われて晴れた日が多かったが、期間の後半は気圧の谷や本州の南海上に停滞した前線の影響により、雨の日が多くなった。中旬は、高気圧に覆われて晴れた日もあったが、寒気や本州南岸に停滞した前線の影響により、雨の日が多くなった。下旬は、期間の前半は高気圧に覆われて晴れた日もあったが、期間の後半は梅雨前線の影響により、雨の日が多くなった。

6月の平均（合計）と旬別の平均気温・降水量・日照時間の平年差（比）と階級

北陸地方平均	6月	上旬	中旬	下旬
平均気温平年差	+0.9	+1.2	-1.2	+2.7
階級	高い	高い	低い	かなり高い
降水量平年比	62%	29%	97%	54%
階級	少ない	少ない	平年並	少ない
日照時間平年比	118%	115%	79%	179%
階級	多い	多い	少ない	かなり多い

北陸地方平均とは、北陸地方にある気象官署及び特別地域気象観測所（9地点）ごとの平年差（比）を平均したものである。

北陸地方気象官署及び特別地域気象観測所（相川、高田、伏木、輪島、敦賀）における6月の主な月間気象要素の累年極値および順位（3位以内）の更新はなかった。

(2) 7月の経過

上旬は、期間のはじめと終わりは高気圧に覆われて晴れた日もあったが、期間の中頃は梅雨前線が本州上に停滞したため、大雨となった。中旬以降は、中旬のはじめに気圧の谷の影響で雨の降った日もあったが、太平洋高気圧の勢力が強く、晴れて厳しい暑さの日が続いた。

7月の平均(合計)と旬別の平均気温・降水量・日照時間の平年差(比)と階級

北陸地方平均	7月	上旬	中旬	下旬
平均気温平年差	+3.0	+2.5	+3.4	+3.0
階級	かなり高い	かなり高い	かなり高い	かなり高い
降水量平年比	76%	203%	3%	0%
階級	平年並	かなり多い	かなり少ない	かなり少ない
日照時間平年比	179%	139%	241%	166%
階級	かなり多い	多い	かなり多い	かなり多い

北陸地方平均とは、北陸地方にある気象官署及び特別地域気象観測所(9地点)ごとの平年差(比)を平均したものである。

北陸地方気象官署及び特別地域気象観測所(相川、高田、伏木、輪島、敦賀)における7月の主な月間気象要素の累年極値および順位(3位以内)更新一覧表

・月平均気温 高い方から

月	順位	地点名	月平均気温	平年差	これまでの最高 (西暦年)	統計開始 (西暦年)	平年値
7	1	新潟	27.4	+3.1	27.1 (1978)	1886	24.3
7	1	高田	27.5	+2.9	27.0 (1978)	1922	24.6
7	1	相川	26.3	+2.7	26.0 (1978/1933)	1911	23.6
7	1	富山	28.1	+3.2	27.1 (1978)	1939	24.9
7	1	伏木	27.5	+2.9	27.3 (1978)	1884	24.6
7	1	金沢	28.3	+3.0	27.5 (1978)	1882	25.3
7	1	輪島	26.7	+2.8	26.0 (2017)	1929	23.9
7	1	福井	28.7	+3.1	27.8 (1978)	1897	25.6
7	1	敦賀	28.8	+3.0	28.2 (1978)	1898	25.8

・月間日照時間 多い方から

月	順位	地点名	月間日照時間(h)	平年比(%)	これまでの最多(h)(西暦年)	統計開始(西暦年)	平年値(h)
7	1	高田	277.6	180	273.5 (1924)	1922	153.8
7	1	富山	288.7	196	286.1 (1939)	1939	147.1
7	1	伏木	287.8	188	272.0 (1939)	1893	153.1
7	1	金沢	289.4	182	280.8 (1939)	1891	158.9
7	3	輪島	285.8	183	298.0 (1939)	1929	156.1

・月降水量の累年極値および順位(3位以内)の更新はなかった。